

知働化フォーラム 2015 を終えて

2015.3.26

2015 年 3 月 5 日に開催した知働化フォーラム 2015 は、いろいろな意味で意義深いイベントでした。ここに、ご支援いただいた方々、運営に携わった方々、そして、参加していただいた方々に感謝の意を表します。このフォーラムの企画から運営に至るプロセスそのものも、私にとって、とてもわくわくと楽しむことができました。総括という意味合いをこめてまとめておこうと思い、筆をとることにしました。あくまでも私見ですので、ここに書かれていないこと、私が気づかなかったことなど多々あるとは思いますが、ご容赦ください。

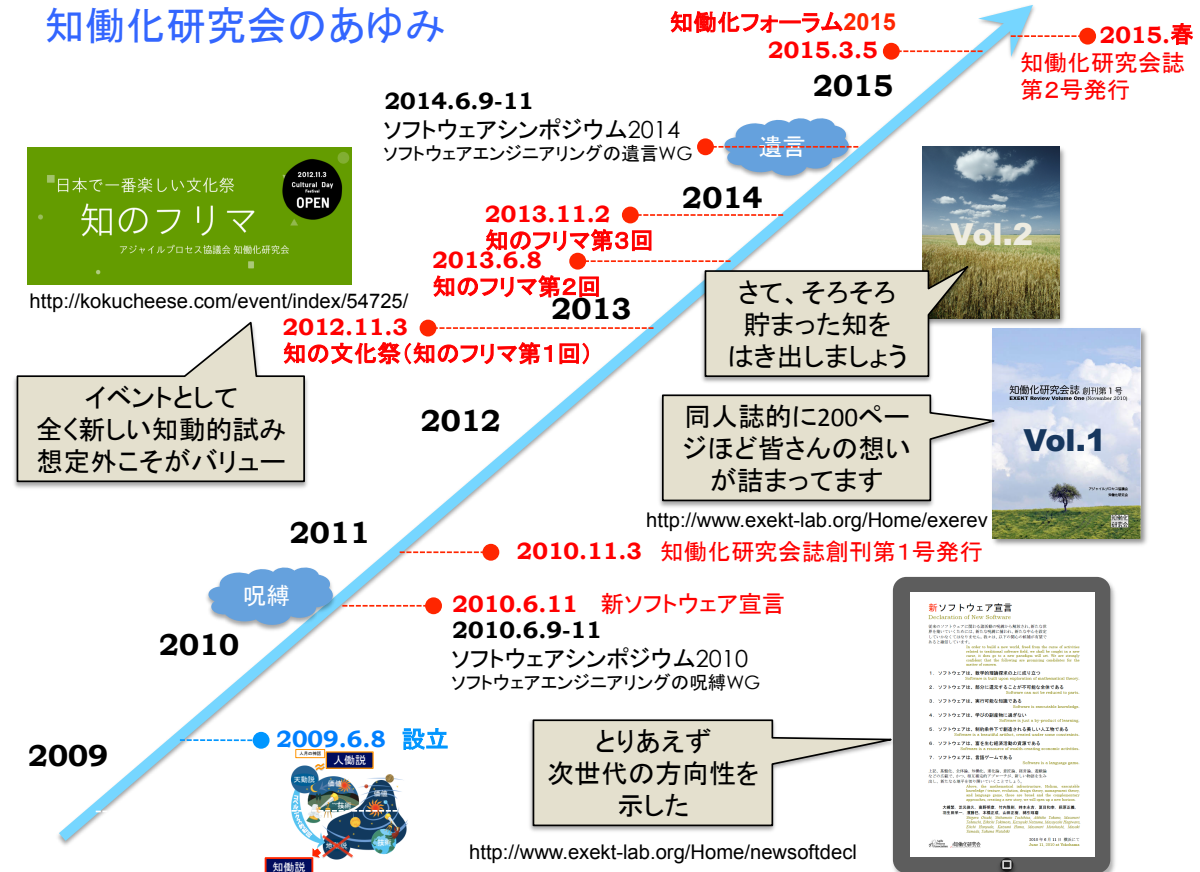
随想風の書き物ですが、この手のイベント開催のビジョン設定から運営に至るポイントが記されています。手弁当で、低予算で、実り多い会合を開催するヒントがたくさんあると思いますので、参考にいただければ幸甚です。

2015 年 そろそろ桜咲く頃
大槻 繁（知働化研究会運営リーダー）

知働化フォーラム 2015 開催までのあゆみ	2
■ 当初の目論見	2
■ 異空間としての横浜市開港記念会館	3
■ 自律的実行委員会のすすめ	4
■ ビジョンとしての開催テーマ	5
■ 講演とワークショップの融合	7
■ 協賛団体の意義	10
■ 告知と集客	13
これからのことをつれづれなるままに	15
■ フォーラムの効用	15
■ 知働化研究会誌 Volume2	15
■ 知働化研究会の活動	16
■ コミュニティデザイン	17
■ P-sec みらい研	18
■ 日本ソフトウェアアーキテクト協会	21
■ ちょいとした本音とお礼	22

知働化フォーラム 2015 開催までのあゆみ

■当初の目論見



時は2013年秋にまで遡ります。2013年11月2日に、知働化研究会主催の第3回知のフリマを開催し、多くの方々の参加を得て盛況の内に終了しました。知働化研究会参加メンバーの自由研究も進んできているようでしたので、成果をまとめる方向となりました。知働化研究会誌創刊第1号発行が2010年11月3日でしたから、3年以上経過していたので、時期的にそろそろまとめる好機と考えました。

そこで2013年末より、研究会誌第2号の発行を目指し、研究会のメンバーの方々の作品執筆を進めていきました。毎月開催の定例会合で、作品内容に関する討論や、執筆状況のフォローアップを行いました。しかし、作品制作の進捗にばらつきがあることから、研究会誌の公開をお披露目するイベントを行い、制作を加速することにしました。これが、「知働化フォーラム2015」の開催動機の一つです。

■異空間としての横浜市開港記念会館

大きなイベントは、どんなに急いでも着手から3か月間にかかるので、春先を目処に開催することにし、まず、場所を押さえることにしました。以前、横浜開催のソフトウェアシンポジウム2010に参加して、伝統的な建物で、とても心地よかったために、開催会場を横浜市開港記念会館で開催することにしました。

横浜市開港記念会館

〒231-0005 横浜市中区本町1丁目6番地

電話 045-201-0708

<http://www.city.yokohama.lg.jp/naka/kaikou/acces.html>

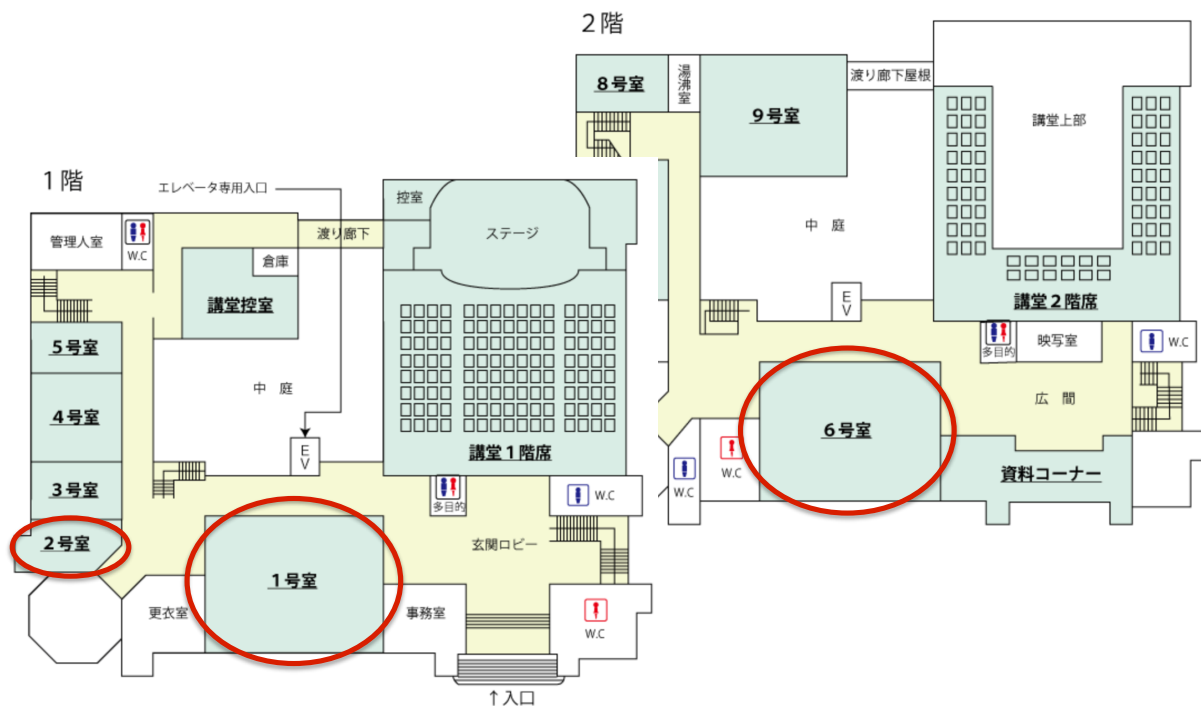
この会館は、利用料がとても合理的なお値段で、横浜市民だと3か月前に申し込むことができます。12月5日の朝9時に会館におもむき、競争率4倍の中、会場確保ができました。これで開催日付が2015年3月5日に決定しました。



おしゃれで近代的な高層ビルもよいのかもしれませんが、いつもとは違う空間であるというのは、この手のイベントではとても重要なことです。新たな発想は、こうい

った心地よさであったり、議論が高揚するような場であったり、日常とは切り離された環境から生まれるものです。横浜市開港記念会館は、この意味で満点です。特に、会議場・教室の天井が高いことが開放感を生みますし、ステンドグラスとレンガ造りという伝統美も味わうことができ秀逸です。

確保した会場は、110名の収容人員の教室を二つ、それと小さな控え室を押さえました。12月5日の時点では、未だ中身は決まっていなかったですが、直感で大教室を複数確保しておけば何とかなるだろうと思って確保しました。



■自律的実行委員会のすすめ

フォーラムの企画・運営については、知働化研究会の定例会合で検討していくことにしました。以下の通りです。いつも会議室は、水越明哉氏のご尽力で、VOYAGE GROUP を使わせていただきました。この場を借りて感謝いたします。

第33回会合	2014年10月22日	フォーラム企画概要の決定
第34回会合	11月26日	同上 詳細化
第35回会合	12月22日	プログラムの検討
第36回会合	2015年 1月21日	運営準備
第37回会合	2月23日	直前準備

これと言って、議題を決めているわけでもなく、何となくやるべきことが、やるべきタイミングで見えてくるといった感覚でした。知働化研究会メンバの役割も、何か任命とか、あらかじめ決めるということは無く、自然と自発的に進めることができました。

プログラム委員（大槻、濱勝巳氏）

ワークショップ（知のフリマ）とりまとめ（濱勝巳氏）

パネルモデレータ（大槻）

ワークショップファシリテーション（高柳譲氏、実行委員の皆さん）

受付・名簿管理（飯泉純子氏、高橋雅宏氏）

懇親会（大槻、濱勝巳氏）

広報・告チーズ（高橋雅宏氏）

知働化研究会誌編集（大槻）

アジャイルプロセス協議会の役割で、会長の濱勝巳氏、運営委員長の水越明哉氏、副会長の飯泉純子氏、さらに、知働化研究会のコンセプトリーダーの山田正樹氏、知働化研究会で作品執筆を手がけていたメンバの方々も、程よい関わり方をしてくれました。

日頃から、仕事やコミュニティ活動、合宿旅行などで親交を深めていると、それぞれの人が、何ができて、どういったことが得意かをお互いに理解できています。

こういったやり方も、これからの時代の新しいマネジメントだと考えています。スコープを決め、人を割当て、WBS（Work Breakdown Structure）で管理するという従来のプロジェクトマネジメントではありません。もっと深いところでの相互理解と、問題や目的意識の共有による統御（ハーネス）とでも言えると思います。

■ビジョンとしての開催テーマ

イベントのプログラムを検討するにあたり、適当な知り合いを配置してそれらしく見えるようにするという方法もあります。そもそも知働化研究会誌の執筆促進が目的だったので、研究会誌執筆陣を講演者に据えてしまうというパターンもありかもしれません。

話は飛びますが、私は、2014 年夏頃から実践的ソフトウェア教育コンソーシアム（P-sec）の WG2（ソフトウェアの方法論に関する実践知と社会基盤）の活動の中で、現状のソフトウェア業界の閉塞感や限界を認識し、新たなソフトウェア、あるいは、ソフトウェアに関わる社会の将来像を模索してきました。この活動成果は、『ソフト

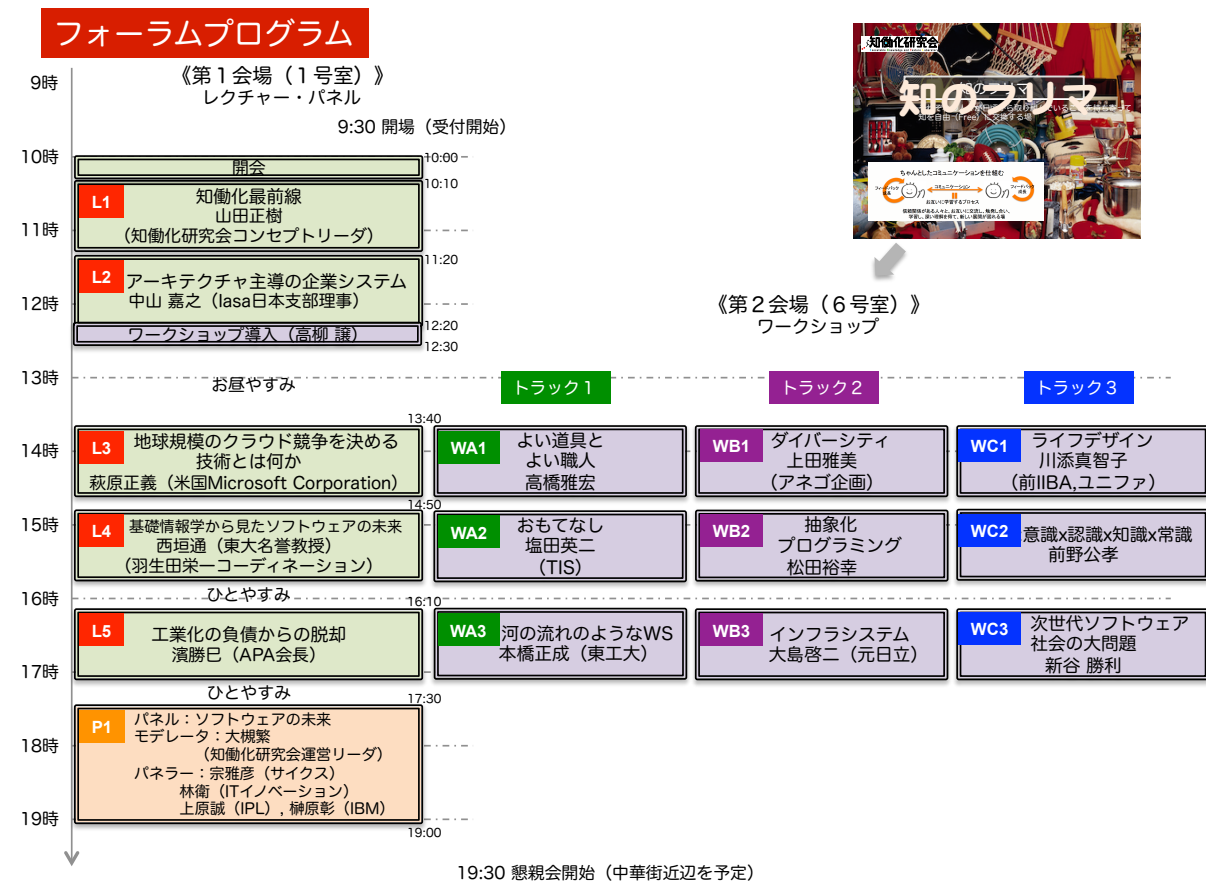
ウェア社会のみちすじ』(P-sec WG2 活動報告書 大槻担当分, 2015.2.17) (<http://p-sec.jp/activity/WG2Rep-01.pdf>) という形で公開しています。

その他、いくつかの団体やコミュニティでも、同様の取り組みがあり、シンクロシティとでも呼ぶのかもしれませんが、同時多発的に同様の問題意識があちこちで芽生えてきているのを感じました。そこで、このフォーラムでも、「未来」をしっかりと見据えた会合にしようと照準を合わせることにしました。



こうして、知働化フォーラム 2015 の開催テーマ『ソフトウェアの未来をつくる』を決めることができました。ちなみに、玉井哲雄教授(東大名誉教授)の『ソフトウェア社会のゆくえ』(岩波書店, 2012.1.17)は、上記の検討の契機を与えてくれます。おりしも、2014年6月のソフトウェアシンポジウム2014(於:秋田)では、濱勝巳氏が音頭を取って「ソフトウェアエンジニアリングの遺言」というワークショップを開催し、この活動準備で玉井教授はじめ、故松本吉宏教授など、各方面の賢人の方々にインタビューを行った折に、現状の限界や閉塞感を共有し、未来へ向けての検討の必要性を強く感じたということも、ここに記しておきたい事項です。

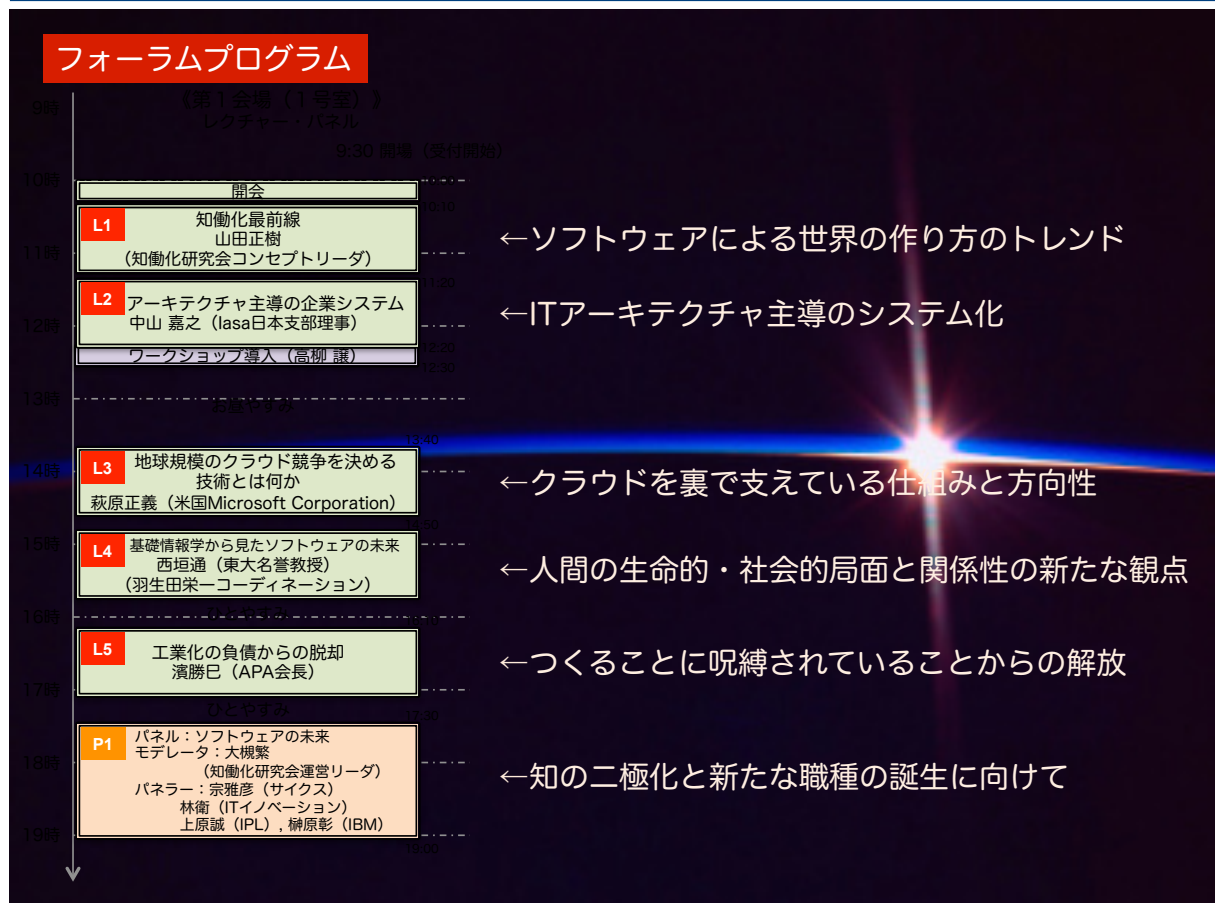
■講演とワークショップの融合



フォーラムの開催テーマ『ソフトウェアの未来をつくる』が決まれば、後はプログラム構成を決めるだけと思いきや、これがなかなか難しい。会場として大教室を2つ確保したこともあり、知働化研究会が主催していることらしきを出すために、通常講演型の1号室と、ワークショップ型の6号室との並行トラックとしました。

講演のプログラムについては、フォーラム全体テーマや趣旨を講演予定の方々にお伝えしながら、少しずつ形を作っていくことにしました。一日の大まかな流れは、最終的に以下のように落ち着きました。

朝一番の講演は、知働化研究会コンセプトリーダーの山田正樹氏の『L1:知働化最前線』です。午前中は、講演トラックのみですし、我々の活動コンセプトをしっかりと伝えるところから始めることにしました。知働化研究会設立は、2009年6月からですが、山田氏の『実行可能知識 (Executable Knowledge)』のコンセプトをきっかけにして、研究会参加メンバーの自由研究を進めてきました。そろそろ次の刺激を得るという意味で、再び、山田氏の話をしっかり聴くのは今後の広がり期待できます。



2 番目の講演は、中山壽之氏による『L2:アーキテクチャ主導の企業システム』です。フォーラムの協賛団体の一つに IASA (Global IT Architect Association) 日本支部があり、今後、アーキテクトという職種の振興をしていこうと考えているため、午前中の講演に配置しました。

午後の3つの講演は、ワークショップトラックと並行しています。午後の最初は、萩原正義氏による『L3:地球規模のクラウド競争を決める技術とは何か』です。とかく世の中は、クラウド、ビッグデータといった言葉に踊らされる傾向がありますが、その背景にある本質的な問題を浮き彫りにするものです。

午後の2つ目の講演は、西垣通教授による『L4:基礎情報学から見たソフトウェアの未来』です。この講演は、元来、羽生田栄一氏によるコーディネーションで、ソフトウェアを中心にしつつ、それを取り巻く社会や制度、人間の本性に関わる話題を提供できればよいと考えていました。

午後の最後の講演は、濱勝巳氏による『L5:工業化の負債からの脱却』です。濱氏とは、『新ソフトウェア宣言』『ソフトウェアエンジニアリングの遺言』など多くの探求でごいっしょにさせていただいています。この講演の直後に、パネル討論があるので、その直前に講演をしてもらう形で、議論の流れが作りやすいように考慮しました。

最後のパネル討論『P1:ソフトウェアの未来』では、私がモデレータをつとめ、パネラーとして宗雅彦氏、林衛氏、上原誠氏、榊原彰氏をむかえてフォーラム全体のべとすることにしました。パネラーの一人一人と事前に懇談をさせていただき、フォーラムの趣旨、パネル討論でのメッセージについて確認をしました。特に、榊原氏に登壇をお願いしたのは、2月の故松本吉宏教授の葬儀会場でお会いして、立ち話でしたが、Smarter City で取り組まれているとのことで、パネル討論にぴったりだと直感したからです。松本教授のお引き合わせと思って、感謝しています。

知働化研究会
Executable Knowledge and Texture Laboratory

ちゃんとしたコミュニケーションを仕組む

フィードバック 成長 ← コミュニケーション → フィードバック 成長

お互いに学習するプロセス

信頼関係がある人々と、お互いに交流し、触発し合い、学習し、深い理解を得て、新しい展開が図れる場

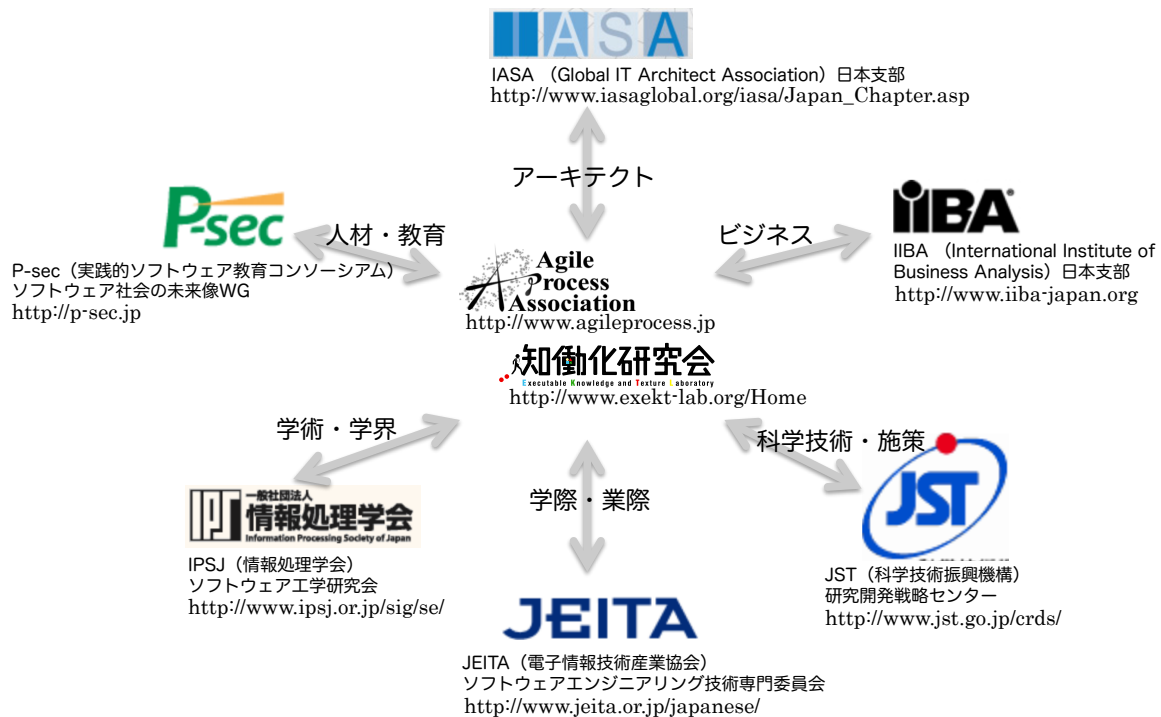
知のフリマ

それぞれの人が日頃から取り組んでいることを持ち寄って
知を自由（Free）に交換する場

トラック1		トラック2		トラック3	
WA1	よい道具とよい職人 高橋雅宏	WB1	ダイバーシティ 上田雅美 (アネゴ企画)	WC1	ライフデザイン 川添真智子 (前IIBA, ユニファ)
WA2	おもてなし 塩田英二 (TIS)	WB2	抽象化 プログラミング 松田裕幸	WC2	意識×認識×知識×常識 前野公孝
WA3	河の流れのようなWS 本橋正成 (東工大)	WB3	インフラシステム 大島啓二 (元日立)	WC3	次世代ソフトウェア 社会の大問題 新谷 勝利

ワークショップ型のセッションの方は、交流方法「知のフリマ」(<http://www.ichicorp.biz/secondary/20140216.html>)を採用しました。これは、知働化研究会の活動の中から生まれてきた人々が日頃から取り組んでいることを持ち寄って知を自由（Free）に交換する場（フリーマーケット）です。従って、今回のフォーラムは、知のフリマ第4回という位置づけにもなっています。ワークショップの詳細企画・運営は、濱勝巳氏、当日総合司会の高柳謙氏が担当しました。午後の部の3コマを使い、6号室の大教室を分割して3トラック並行で進めることにしました。協賛団体の関係の方のワークショップも配置し、刺激的な交流の場になるように考慮しました。

■協賛団体の意義



イベントの協賛・後援を関連する6つの団体をお願いすることにしました。他団体との交流は、持ちつ持たれつの関係ですが、以下のような効用があります。

集客・参加募集の協力が得られること

主催団体（知働化研究会）の認知度を上げることができること

今後の諸活動の協調関係の可能性を高められること

知働化研究会の活動と、6つの協賛団体とが協調していく際の観点は、以下のようになっています。

P-sec（実践的ソフトウェア教育コンソーシアム）

P-sec は、鶴保証城氏を会長とするソフトウェアに関する人材について活動している団体です。この中で、私（大槻）は 2011 年末より WG1（要求分析を重視した設計手法と分析、設計方法論）、WG2（ソフトウェアの方法論に関する実践知と社会基盤）、そして、ソフトウェア社会の将来像研究会（通称：みらい研）のサブリーダを野木秀子リーダの下でつとめてきました。今後、新たなソフトウェア社会、そして、その人材像を探求していく際に、知働化研究会と協調していこうと考えています。

IASA (Global IT Architect Association) 日本支部

IASA は、IT アーキテクトに関する知識体系 ITABOK (IT Architecture Body of Knowledge) の整備、普及・啓蒙等を行っている団体です。2014 年の夏に秋田で開催されたソフトウェアシンポジウム 2014 の折に、林衛氏と濃密に懇談する機会があり、アーキテクトの重要性について問題意識を共有することができました。以降、私や濱勝巳氏も IASA に法人加盟することにし、今後の日本のソフトウェア社会における新しい人材像、特に、アーキテクトという職種を育てていくために、知働化研究会の活動含めて協調していこうと考えています。

IIBA (International Institute of Business Analysis) 日本支部

IIBA は、ビジネスアナリシスに関する知識体系 BABOK (Business Analysis Body of Knowledge) の整備、普及・啓蒙等を行っている団体です。2013 年秋に P-sec WG2 会合で、アジル経営 WG の川添真智子氏の講演をしていただいたのを契機に、ビジネスアナリシスについての交流を開始しました。本フォーラムでもパネル討論に宗雅彦氏に登壇していただくことにしました。

JST (科学技術振興機構) 研究開発戦略センター

JST は、ソフトウェアのみならず科学技術振興の総本山的な位置づけの権威ある団体です。2014 年 6 月に研究開発戦略センター主催のシステム科学検討会にアジャイルプロセス協議会の濱勝巳氏が講演を行い、一般科学技術分野の専門家にアジャイルプロセスを紹介しました。おりしもその検討会に、大島啓二氏 (元日立製作所) が参加していたため、フォーラムの協賛をお願いしました。知働化研究会で検討しているソフトウェア哲学からのアプローチは、科学技術一般に援用することもできますし、逆に、科学技術の中でソフトウェアの知を位置づけていくためにも、こういった団体と協調していくことは意味のあることだと考えています。

IPSJ (情報処理学会) ソフトウェア工学研究会

日本のソフトウェアエンジニアリングの分野の老舗的存在です。本フォーラムに出演の羽生田栄一氏もこの研究会の主査をつとめていましたし、私も 1990 年頃幹事をやっていました。こういった経緯でこの研究会方面には友人・知人も多いため、参加募集の依頼をするために、後援をお願い

いしました。また、僭越ですが、「ソフトウェア工学」という一つの学問分野を、新しい時代の「学問」として再定義していくためには、知働化研究会のアプローチは刺激になるのではないかと考えています。

JEITA（電子情報技術産業協会） ソフトウェアエンジニアリング技術専門委員会

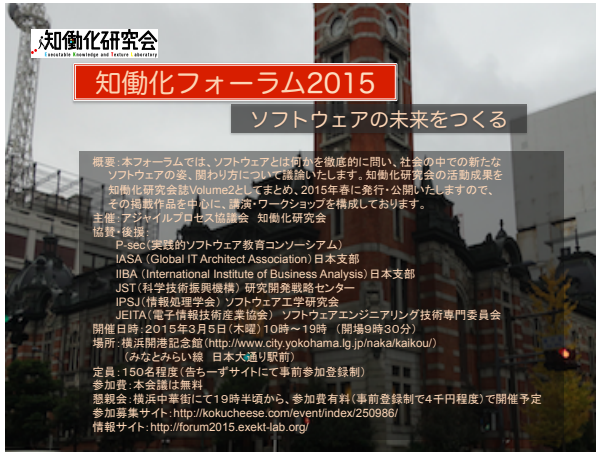
電子協のこの委員会は、私は20年以上参加しています。二木厚吉教授が主査をつとめており、私は設立当初から幹事をやりました。最近、飯泉純子氏が幹事をつとめています。ソフトウェアエンジニアリングの領域のさまざまなトピックスを、中心になっている人に講演していただき、つつこんだ議論をする会合です。参加委員は、大手総合電機メーカーや製造系の企業です。本フォーラムの後援をお願いしました。

2014年の12月初旬に各方面に協賛依頼をだして、承諾を得ていきました。経緯は、以下のようにまとめられます。

#	略称	正式名称	依頼開始日	尽力仲介者	承認日	備考
1	P-sec	実践的ソフトウェア教育コンソーシアム ソフトウェア社会の将来像WG	12月10日	大槻繁(一) P-secWGサブリダー	12月17日	
2	IASA	Global IT Architect Association 日本支部	12月9日	林衛(ITイノベーション) チーフアドバイザーボード	12月10日	
3	IIBA	International Institute of Business Analysis 日本支部	12月12日	川添真智子(ユニファ) IIBA日本支部代表理事	12月19日	イノベートジャパン(12月16日)にて 川添氏に依頼
4	JST	科学技術振興機構 研究開発戦略センター	12月6日	大島啓二 システム科学検討会ワー クショップ委員	3月4日	濱さんより紙の依頼書送付、その後、 何回か書類不備で出し直しが続く
5	IPSJ	情報処理学会 ソフトウェア工学研究会	12月6日	菊地奈緒美(沖電気) 研究会幹事	12月13日	
6	JEITA	電子情報技術産業協会 ソフトウェアエンジニアリング技術専門委員会	12月10日	飯泉純子(一) 委員会幹事	12月11日	

どの団体も、理事会、幹事会等の承認を得るために、概ね1週間程度はかかります。普段から交流のある身近な団体の承認はすぐ得られます。大変だったのは、JSTでした。なんと、最終承認が得られたのは、開催日前日でした。書面の不備が何回か指摘されて、その度に書面郵送を繰り返しました。ご担当の富川弓子氏には、本当にお手数をかけてしまい申し訳なく思っています。開催日当日に、富川氏にお会いすることができました。参加いただいたことに感謝すると同時に、苦勞したやりとりがあるためか、お会いした時に初めてとは思えませんでした。

■告知と集客



知能化研究会
知能化フォーラム2015
ソフトウェアの未来をつくる

概要: 本フォーラムでは、ソフトウェアとは何者かを徹底的に問い、社会の中での新たなソフトウェアの姿、関わり方について議論いたします。知能化研究会の活動成果を知能化研究会誌Volume2としてまとめ、2015年春に発行・公開いたしますので、その掲載作品を中心に、講演・ワークショップを構成しております。

主催: アジャイルプロセス協議会 知能化研究会
協賛・後援:
P-sec (実践的ソフトウェア教育コンソーシアム)
IASA (Global IT Architect Association) 日本支部
IIBA (International Institute of Business Analysis) 日本支部
JST (科学技術振興機構) 研究開発戦略センター
IPSJ (情報処理学会) ソフトウェア工学研究会
JEITA (電子情報技術産業協会) ソフトウェアエンジニアリング技術専門委員会

開催日時: 2015年3月5日 (木曜) 10時～19時 (開場9時30分)
場所: 横浜開港記念館 (<http://www.city.yokohama.lg.jp/naka/kaikou/>)
(みなとみらい線 日本大通り駅)
定員: 150名程度 (告ちーずサイトに事前参加登録制)
参加費: 本会場は無料
懇親会: 横浜中華街にて19時半頃から、参加費有料 (事前登録制で4千円程度) で開催予定
参加募集サイト: <http://kokucheese.com/event/index/250986/>
情報サイト: <http://forum2015.exeht-lab.org/>

開催概要

日時	2015年03月05日(9:30開場、10:00開演、19:00終了予定) 終了後懇親会開催(中華街界隈にて)、なお参加費は有料となります
開催場所	横浜開港記念会館 1号室、6号室 (〒231-0005 神奈川県横浜市中区本町1-6) → 大きい地図を開く
参加費	無料
定員	150人(先着順)
申し込み開始	2015年01月04日 00時00分から
申し込み終了	2015年03月05日 00時00分まで
懇親会	19:30～21:00頃
懇親会場所	横浜中華街界隈 (決定次第掲載します)
懇親会費	4,000円程度(税込)
懇親会定員	50人(先着順)
主催	アジャイルプロセス協議会 知能化研究会

告ちーずサイト: <http://kokucheese.com/event/index/250986/>

2015 3月5日 1号室

時間	1号室
10:00-10:10	開会
10:10-11:10	講演 L1 知能化の最前線 山田 正樹 氏 (メタボリックス/知能化研究会コンセプトリーダー)
11:20-12:20	講演 L2 アーキテクチャ主導の企業システム 中山 嘉之 氏 (Iasa日本支部理事)
12:30-13:40	休憩 (70分)
13:40-14:40	講演 L3 地球規模のクラウド競争の勝者を決める技術とは何か 萩原 正義 氏 (米国Microsoft Corporation)
14:50-15:50	講演 L4 基礎情報学から見たソフトウェアの未来 西垣 通 氏 (東京大学名誉教授, 東京経済大学)
15:50-16:10	休憩 (20分)
16:10-17:10	講演 L5 工業化の負債からの脱却 濱 勝巳 氏 (アッソーリ/アジャイルプロセス協議会会長)
17:30-19:00	パネルドิสカッション P1 ソフトウェアの未来 モデレータ: 大槻 繁 氏 (—/知能化研究会運営リーダー) パネラー: 宗 雅彦 氏 (サイクス)、林 衛 氏 (ITイノベーション)、上原 誠 氏 (アイピーエル)、柳原 彰 (IBM)
19:00-19:10	閉会

2015 3月5日 6号室

時間	Track A	Track B	Track C	Track D
13:40-14:40	WA1 よい道具とよい職人 高橋 雅宏 氏 (知能化研究会)	WB1 ダイバーシティのうまみと未来についての部屋 上田 雅美 氏 (株式会社アネゴ企画)	WC1 マチコの(あなたの)知らない世界 消費/消費のライフデザイン術 川添 真智子 氏 (株式会社ユニファ) 高原 将志 氏 (クラスメソッド株式会社)	WD1 募集中
14:50-15:50	WA2 ソフトウェアによる「おもてなし」は可能か? 塩田英二 氏 (TIS株式会社)	WB2 抽象化プログラミングの勤め —Mathematicaを例として— 松田 裕幸 氏	WC2 意識 x 認識 x 知識 x 常識 前野 公孝 氏 (株式会社アシルコア)	WD2 募集中
15:50-16:10	休憩			
16:10-17:10	WA3 河の流れのようなワークショップ 本橋 正成 氏	WB3 社会インフラシステムと日本のこれから —広域分散システムとソフトウェア開発— 大島 啓二 氏 (日本科学技術連盟、元日立製作所)	WC3 次世代ソフトウェア社会の大問題 新谷 勝利 氏 (P-sec委員)	WD3 募集中

プログラム掲載サイト: <http://forum2015.exeht-lab.org/schedule>

参加募集は、高橋雅宏氏の尽力で、告ちーずを活用したサイトを制作し、1月4日から公開しました。告ちーずサイトは、プログラムを掲載できるほど容量がないために、別途サイトを濱勝巳氏の尽力で、プログラム等の詳細ご案内サイトを公開しました。一応、定員は多めに150名というように掲示しておきました。2月に入り、募集活動を本格化するために、濱氏が、洒落たリーフレットをデザインしてくれました。リーフレットは1000部刷って、Developers Summit 2015等の関連イベントで配布しました。なお、デザインの統一性を鑑み、本フォーラムのイメージカラーをWebセーフカラーCC0000(赤色系)と設定しました。

[illegible]

濱勝巳氏デザインのリーフレット

私の予想では、適正参加人数 80 名程度、最低でも 60 名、上手く行って 100 名程度参加者数があればよいと思っていました。最終的に、告ち一ず申込み数は 76 名、講演者等で告ち一ず申込みをしていない方が 5 名だったので、合計 81 名となりました。一方、開催日当日に実際に参加した人数は、受付時集計で 69 名でした。当日受付チェックを素通りした方もいらしたかもしれませんが、概ね、想定内の期待通りの盛況な会合となりました。

これからのことをつれづれなるままに

■フォーラムの効用

知働化フォーラムを終えて、ふりかえって見るに、その効用は以下のようにまとめることができます。成果の発表というマイルストーンという位置づけより、これからのきっかけになっているという方が的確です。

効用1：知働化研究会誌が進捗したこと

効用2：次世代のソフトウェア社会を探究する契機となったこと

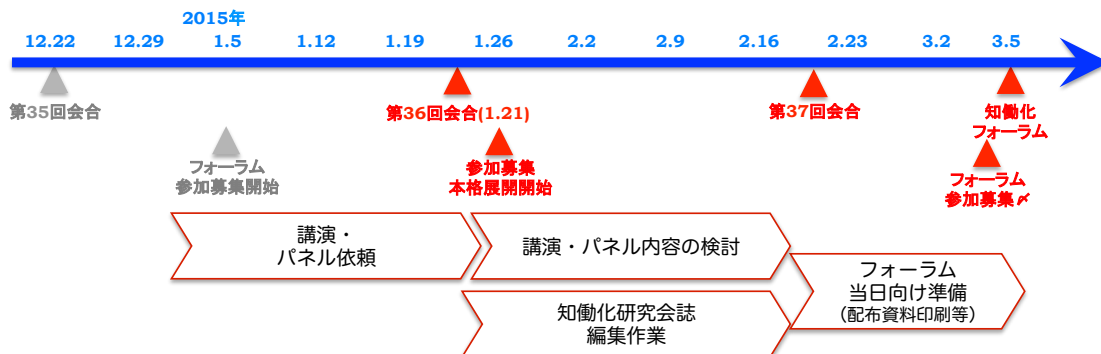
効用3：周辺コミュニティと連携していく体制を整え始められたこと

効用4：アーキテクトの時代を実感することができたこと

効用5：新たな知働化研究の幕開けを予感・実感できたこと

■知働化研究会誌 Volume2

元来、フォーラムは、知働化研究会誌制作を促進するのが目的でした。当初立てたスケジュールでは、以下のようにフォーラム開催時に知働化研究会誌 Volume 2 を公開するように設定していました。



結果として、フォーラム当日には間に合いませんでしたが、むしろ、フォーラムの活動を通じて、検討も進んだと思われますし、新たなテーマの作品を盛り込むこともできそうです。

もともとの研究会誌執筆陣の何名かの方々は、フォーラムでも講演やワークショップリーダーをつとめているために、関連した知働化研究会誌の作品へのフィードバックを期待することができます。また、講演スライドに解説をつけたものや、ワークショップレポートのようなものも、記事・コラム・随想などの形に仕上げていくこともできると思います。心機一転の公開までのスケジュールは、あらためて検討します。



著者	作品略称
荒川 正義	スキル・センス・パッション
飯泉 純子	お野菜育ての面白さ
大槻 繁	知平
塩田 英二	おもてなしとおまかせ
高橋 雅宏	よい道具とよい職人
萩原 正義	クラウドの先端技術
羽生田 栄一	第2技術としてのアジャイル
濱 勝巳	作る人と使う人
藤原 剛	連想検索の実践
水越 明哉	バーンダウンチャート
本橋 正成	ゆる思考
山田 正樹	知働化最前線

WB1 ダイバーシティ
上田雅美
(アネゴ企画)

WB2 抽象化
プログラミング
松田裕幸

WB3 インフラシステム
大島啓二 (元日立)

WC1 ライフデザイン
川添真智子
(前IIBA, ユニファ)

WC2 意識×認識×知識×常識
前野公孝

WC3 次世代ソフトウェア
社会の大問題
新谷 勝利

L2 アーキテクチャ主導の企業システム
中山 嘉之 (Iasa日本支部理事)

P1 パネル：ソフトウェアの未来
モデレータ：大槻繁
(知働化研究会運営リーダー)
パネラー：宗雅彦 (サイクス)
林衛 (ITイノベーション)
上原誠 (IPL), 榊原彰 (IBM)

WA2 おもてなし
塩田英二
(TIS)

WA1 よい道具と
よい職人
高橋雅宏

L3 地球規模のクラウド競争を決める
技術とは何か
萩原正義 (米国Microsoft Corporation)

L4 基礎情報学から見たソフトウェアの未来
西垣通 (東大名誉教授)
(羽生田栄一コーディネーション)

L5 工業化の負債からの脱却
濱勝巳 (APA会長)

WA3 河の流れのようなWS
本橋正成 (東工大)

L1 知働化最前線
山田正樹
(知働化研究会コンセプトリーダー)



■知働化研究会の活動

知働化研究会設立当初の2009年頃は、2か月に1回程度の会合と、年1回程度の研究会誌を発行することを目的としていました。なかなかこのペースで進めていくのは難しいのですが、研究会会合では、各自の検討や研究アプローチやその成果などを披露して討論を重ねていく方法を採用していました。この方法は、参加者にとっての負担は若干大きいのですが、その代わりとてもわくわくして充実したものでした。今後は、今回のフォーラムの結果等を受けて、議論を活発に進めていく方法に回帰しようかと考えています。

私の中では、こういった自由研究型のコミュニティ運営が好みです。その運営方法も確立しています (<http://www.ichicorp.biz/secondary/20140214.html>)。他のコミュニティで少し試みたことがあります。旧来の委員会のようなつもりで参加してくる方にはつらいものがあるようですが、知働化研究会のメンバは意識も高いので、この方法が有効だと考えています。

■コミュニティデザイン

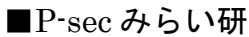
コミュニティ活動というのは、若干のミッションやカネで縛られることもあります。が、基本的に手弁当であり、参加・退出も自由です。会社という組織での活動が、契約や規則で縛られているのに対して、自発的・自律的で自由な活動です。その一方で、より多くの智慧がなくてはなりませんし、ビジョンや問題意識を共有し、求心力を維持していかなくてはなりません。

参加者のメリットは、金銭的価値というよりも、知識・知見、人的ネットワーク、動向などを肌感覚として感じることにいった事項になります。かつては、欧米の知識体系や特定の手法やツールの内容や活用方法を伝授していく勉強会的な活動がありましたが、この手のものはある程度、インターネットを介した情報収集、セミナーや研修スタイルのもので済むために、あまり価値がなくなってきました。私はこういった活動方法を「リニアモデル」と呼んでいます。

現在、コミュニティ活動で価値があるのは、face to faceで濃密な検討や議論を重ね、時々刻々と知を発展させていく「ダイナミックモデル」です。それぞれの人が「知」や自分の検討課題を持ち寄り、交流する「場」です。

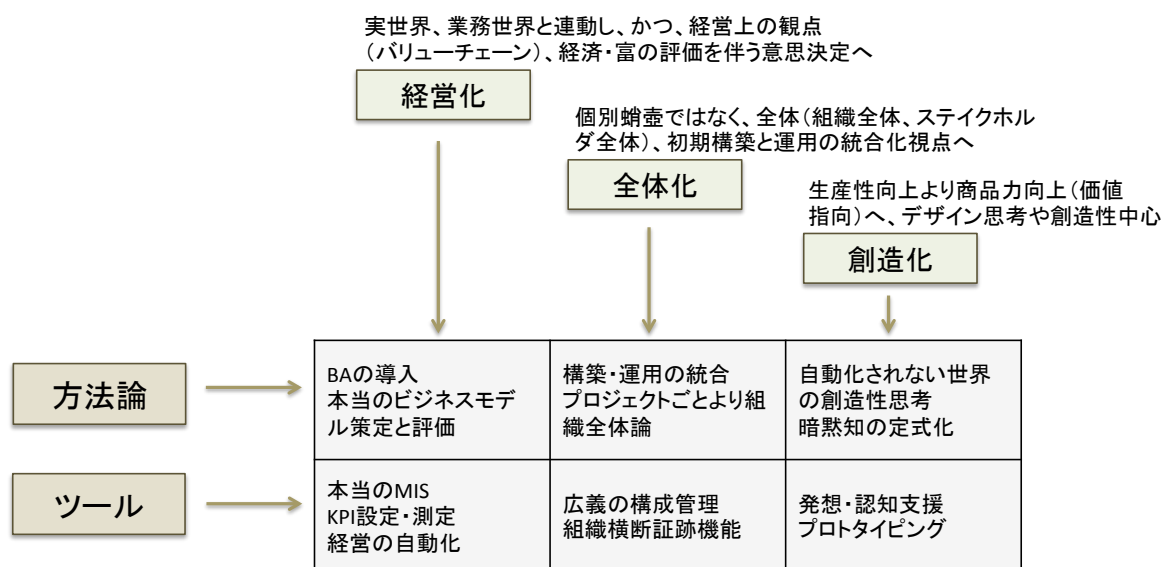
アジャイルプロセス協議会は、2003年夏に設立され、いろいろな局面からアジャイルプロセスに関する検討をしてきました。具体的な活動は、ワーキンググループや研究会で行っており、現段階では、見積・契約WG、アジャイルマインド勉強会、アジャイル・サービス・マネジメントWG、アジャイルテストWG、アジャイル経営WG、そして、知働化研究会が活動しています。誤解を恐れずに言うならば、アジャイルプロセス協議会の諸活動は、従来のウォーターフォール型の開発プロセスに代表される伝統的なソフトウェアエンジニアリングを時代に合わせて再構成する活動だったと思います。アジャイルプロセス自体は、日本にエクストリーム・プログラミングの提唱者であるケント・ベックが2001年4月に来日したのが契機になり、普及が進みました。概ね、アジャイルプロセスについては、行き渡った観があり、成熟期に入っていると考えています。知働化研究会は、2009年から活動を開始していますが、活動目的の一つは、ポストアジャイルを探ることです。

知働化研究会の成果はたくさんありますが、実行可能知識と様相というテーマで検討を開始し、『新ソフトウェア宣言』という新たなパラダイムの提唱、『知のフリマ』という知の交換・交流方法の実践などがあり、時代を牽引する「哲学」を探求しているところにあります。従って、私は、コミュニティの構造としては、後で述べるソフトウェアアーキテクト協会を含め、次図のようなイメージを抱いています。あくまでも私見です。



P-sec（実践的ソフトウェア教育コンソーシアム）の活動に参加しはじめたのは、2011 年末頃からです。いくつかの WG（ワーキンググループ）あるいは研究会のサブリーダーという形で参加しています。リーダーはいずれも野木秀子氏です。従って、というわけでもありませんが、自由に運営を含めて取り組まさせていただきます。

2011 年 11 月～2013 年 3 月までの WG1（要求分析を重視した設計手法と分析・設計方法論）では、ソフトウェアエンジニアリングに関する手法やツールの調査を通じて、今まで技術情報を把握し、今後の動向を予想しました。その結果、今後、ソフトウェアエンジニアリングの流れは、「経営化」「全体化」「創造化」の方向へ行くという認識に至りました。



2013 年 4 月～2014 年 12 月までの WG2（ソフトウェアの方法論に関する実践知と社会基盤）では、ソフトウェアに関わる人々の問題意識を共有することを目的として、関連する団体との交流・コラボレーションを行いました。その中で、今回のフォーラムの協賛を得た IIBA、IASA との交流も始めることができました。私は、こういったコミュニティ間の連携を”The Community of Community”と称して、信頼関係に基づくムーブメントの新たな方法と考えており、今後も、この仕組みを強化していくつもりです。

WG2 の活動を踏まえて、人材や今後のソフトウェアをとりまく社会について検討していくために、2015 年 2 月 17 日から「ソフトウェア社会の将来像研究会（通称：みらい研）」を P-sec の活動として開始しました。

フォーラムのテーマが『ソフトウェアの未来をつくる』とあるように、みらい研の門出にぴったりです。つまり、本フォーラムは、みらい研の実質的なキックオフと位

置づけてもよいと思っています。

フォーラムのワークショップで新谷勝利氏がリーダの『ソフトウェア社会の大問題』がありますが、これは、P-sec の 1 月末の会合で、これからはエンタプライズ系、制御系、組み込み系といった垣根を越えたソフトウェアの取り組みが本格的になっていく中で、どういったことがソフトウェア社会の問題になるという議論があつて、これを踏まえたワークショップになっています。

みらい研の本格的な活動は、4 月以降（2015 年度）になると思いますが、以下のようなテーマで議論・検討を開始しようと思っています。

テーマ 1：知の連携・知の構造化・仕組みとしての知

集合知、組織知能といった言葉に見られるように、知は人の社会的活動の中で規定され、交換され、流通していきます。次世代のソフトウェア社会での知とは何でしょうか？ どのような種類の知があるのでしょうか？ 構造はあるのでしょうか？ 体系化は可能でしょうか？ 知に関わる社会的な制度や規範はどのように再定義されるのでしょうか？

テーマ 2：知の二極化と人材選別・育成

今後は、創造的カテゴリ、技能的カテゴリという二極化はますます進んでいくでしょう。ソフトウェアに関わる知の二極化の実態はどういったところに現れていますか？ 企業内の人的リソース配分、大学での教育、その他教育機関などの役割などが、どのように変わっていくのでしょうか？ 「教育」という言葉や概念はどのように再定義されていくのでしょうか？

テーマ 3：ソフトウェア社会再考

Sier の終焉が叫ばれ、ユーザ・ベンダの取引・契約、企業活動でのソフトウェアの位置づけ、オープンソースの活用方法などの様相が変わってきています。ソフトウェアに関わるビジネスで、プレーヤはどのように変わっていくのでしょうか？ 既存のプレーヤはどのように変わっていき、また、新たなプレーヤは登場するのでしょうか？ コードを書くこと、プログラミングという職種はどこへ行ってしまうのでしょうか？

(P-sec みらい研の 2015 年度初回会合を 4 月 24 日 18 時からサイバー創研（渋谷）にて開催します。みらい研参加ご希望の方は、P-sec 事務局まで連絡してください。)

■日本ソフトウェアアーキテクト協会

これは、未だ影も形も無い団体名です。ここのところアジャイルプロセス協議会、知働化研究会、P-sec（実践的ソフトウェア教育コンソーシアム）などのコミュニティ活動、そして、いくつかコンサルティング活動を進めてきた中で、ぽっかりと穴があいている領域に気づいたのです。ウォーターフォールかアジャイルか、プロセスかプロダクトか、技術か人材かといったさまざまな議論をしてきた中で、何か物足りなさというのか、本質的でないというのかわかりませんが、ソフトウェアとは何かをしつかりと問い、人類・社会に貢献していくような活動の原動力の源泉を提供している領域のようなものが欠如しているという感覚です。

知働化研究会は、各自の主観の中で、それぞれのテーマを深掘りして、「ソフトウェア哲学」とでも言うべき活動をしてきました。今後もこの方向の活動は継続していきますが、哲学を「形」にしていくことも理論・実践という両輪として必要です。各自のビジネス領域は実践の場の一つですが、実践の智慧も何か方向性があるのではないかと感じています。

かつてアジャイルプロセス協議会の中で「アジャイル・ソフトウェア・セル生産WG」（2005年8月～2009年3月）という活動を、故松本吉宏教授のご指導の下で進めました。ソフトウェアファクトリーの考えに始まり、エコシステムに関する検討などを行いましたが、ソフトウェアに関する知見や技術は、結局、それに関わる人までデザインしなくてはならないという認識に至りました。狭義のアーキテクチャという言葉は、計算や情報処理の概略構造という意味に留まっていますが、時空を越えた社会システムのデザインまで見通さなくては正しいアーキテクチャとは言えません。

こういった新しいシステムをデザインしていく人を「ソフトウェアアーキテクト」と呼びたいと考えています。おそらく、プロデューサ、ディレクタ、リーダといった呼び方しか未だないのかもしれませんが、結局は「個」の力によるものです。

「IT」という言葉を使っていないことに注意してください。そもそも曖昧な言葉ですが、ソフトウェアにとってITは、ヴィークル（乗物・媒体）に過ぎません。ITアーキテクトについては、IASAの活動等で一般的な知識体系が整備されていくかもしれませんが、ソフトウェアアーキテクトは、あくまでも「個」の領域です。

上記のような問題意識に基づき、こういった方向性に賛同していただける方々を集め、近々、「日本ソフトウェアアーキテクト協会」を設立することを目論んでいます。

■ちょいとした本音とお礼

知働化フォーラム 2015 のふりかえりのメモを作成しようと書き始めたら、ついつい筆がすべって長々とした書き物になってしまいました。たかが、一つのイベントを開催するのに、背後にこんなに思惑、想い、妄想がおりまざっていると驚かれた方も多いのではないかと思います。こうした書き物にすることが、「意図」を伝える最良の方法ですし、そもそもちゃんと書いたものしか残りません。個人名も実名で記載させていただきます。もし、不都合がある方がいらっしゃいましたら、お知らせいただければイニシャルトークに置き換えます。

運営側からして今回のフォーラムほど、楽なものはありませんでした。これ全て、関係者の方々の自律的貢献によるものだと思います。「信頼」とは、お互いに理解し、お互いの行動を予想し、お互いに協調してコトを進めるということだと思います。その意味で、コミュニティ活動を通じて信頼関係を築き、それに基づいてものごとを進める心地よさを実感できたことに、心より感謝いたします。

この随想集の後半に書いた「これからのことをつれづれなるままに」のいくつかの形になっていけば、知働化フォーラム第2回の開催も期待できると思っています。皆さまのますますのご発展、自由研究の進展をお祈りしつつ、筆を置きたいと思っています。

2015 年 八ヶ岳はそろそろ雪解け
大槻 繁

本資料は、大槻の気楽な随想ですが、以下の用途を想定しています。

知働化フォーラム 2015 協賛団体への御礼のおまけ

知働化研究会用：知働化研究会メンバーの方々との運営上の意識共有と

知働化研究会誌のフォローアップ

アジャイルプロセス協議会運営用：ポストアジャイルプロセス検討の一環

P-sec みらい研用：みらい研の活動コンセプトの提示と、討議事項の確認

IASA 日本支部用：アーキテクトに対する考え方、および、

コミュニティデザインの考え方の提示

その他関係者との議論用：現状の私のコミュニティ活動のアプローチ

